

美術史を繙くことは“目からウロコの連続”

「秋の教養講座 2014」開催（11/3 奈良女子大ほかで）

恒例になって参りました当協会主催の「秋の教養講座」が、去る 11 月 3 日（文化の日）に奈良女子大学の LL2 教室で講演会の部が実施されました。

今年度の講師は当協会理事で、奈良県立美術館学芸課長でもある南城守氏が担当し、「印象派と浮世絵版画」をテーマに、盛りだくさんの内容を披瀝されました。今回の論点は、とくに西洋と東洋における「造形観」の差異についてでしたが、この難解で奥深いテーマに歯切れのいい解説あるいは解答へのヒントが次々と出されて、聴衆を魅了してやみませんでした。参加者は 48 名（会員 22、一般 26）でした。

話は宗教絵画からの解放を伴うルネサンス美術から始まり、西洋画の特色である遠近法と陰影（日本画になかった二大要素）について論述。さらにパリ万博などでの「浮世絵との遭遇」など、異なる文化圏や絵画様式が相互に及ぼし合った影響について、様々な画家の例をあげて論じられました。

また、19 世紀の写真術の出現に伴う美術の独自性とその後の進展、とくに印象派絵画と立体派（キュビズム）の意義などについて興味深い解説がなされました。時代と流派の視点を変えてみる論の展開は、短時間に理解するには深遠な部分もありましたが、絵画の東西交流の端緒となった「浮世絵」との出会いが与えた「影響」について聴衆の皆様も十分ご理解いただいたことと存じます。それにしても「浮世絵」の西洋絵画に与えた衝撃は我々日本人には意外なほど大きかったようです。講演後は、講師に対し質疑が寄せられ、それぞれにお答えいただきました。



奈良女子大で講演する南城氏

（中浦東洋司）



モネ「ラ・ジャポネーズ」(1876)
ボストン美術館所蔵
ジャポニズムの代表的作品



講演後の懇親会
野菜ダイニング「菜宴」にて

講演後、参加者のうち希望者は場所を野菜ダイニング「菜宴」に移して、懇親会に流れ込みました。懇親会では、新入会員や再入会員の方もまじえて、約 20 名がひとつのテーブルを囲んでなごやかに歓談し、とても楽しいひとときとなりました。

野菜ダイニング「菜宴」

☆近鉄奈良駅より徒歩 1 分の好立地。
☆料理・ドリンクともにリーズナブルな価格で提供しております。 ☆女子会や 2 次会パーティーに同窓会など、各種宴会にもご利用いただけます。 ☆詳しくはお問い合わせ下さい。 ☎ 0742-26-0835

フランス文学の庭から <36> 名句の花束

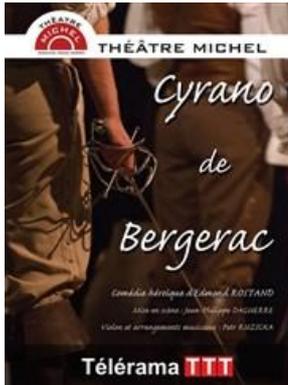
三野 博 司

会長・奈良女子大学教授

太陽のように輝くことばで醜さも消えてしまう (1)

Il sent sa laideur fondre à ces mots de soleil...

(ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』1897年)



前号までに、「美女と野獣」型物語のひとつとしてヴィクトル・ユゴーの『ノートルダム・ド・パリ』を3回にわたって取り上げました。この小説では、おとぎ話とは違って、野獣が美しい王子に変身するという結末はありません。カジモドのエスメラルダにたいする至純の愛にもかかわらず、彼がジプシー娘から得るものはせいぜい好意であり、愛ではありません。他方で、野獣というほどではありませんが、醜い姿のまま、変身することなく愛する女性に受け入れられる物語があります。とはいえ、そのとき彼の命数は尽きるのですが。

ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』は、1897年の初演以来、フランスで上演され続けています。2014年11月7日から15日まで、私がパリに滞在したあいだにも、二つの小劇場で上演されていました。両方を比較してみようと思ったのですが、滞在中の予定がかなり詰まっていたので、チケットを一枚だけネット予約しました。

劇場はThéâtre Michel。初めての場所なので住所を頼りに出かけました。Rue Troncheを北上して、Rue Maturinに入っただけであらわれた最初の劇場でチケットを見せると、ここではない隣の劇場だと言われました。外へ出て、建物に掲げられた看板を見ると、Théâtre Maturinとあります。そもそもRue Maturinの名前で気づくべきだったのですが、カミュの『誤解』が1944年に初演された劇場です。Théâtre Maturinがパリのどこにあるのか、これまで調べてみようともしなかったのですが、今回偶然にそれを発見したという次第です。あとでネットで調査したところ、劇場のサイトにはきちんと『誤解』がここで初演されたことが明記されていました。

翌日、スピケルさん（国際カミュ学会会長）、ブロンドーさん（同副会長）と、個別に会う機会があったので、この話をしたところ、パリ在住の二人とも「ええ？ それどこにあるの？」という反応でした。MadeleineとSaint-Lazareのあいだ、とこちらは答えました。まあカミュ研究にとって些事ではありますが……。ただこちらとしては、偶然に間違っただけで劇場に入って、かえって得をした気分でした。

そして目当てのThéâtre Michelはその隣でしたが、外見ではどちらの劇場も同規模で、いまは地域に溶け込んだ場末の芝居小屋といったたたずまいです。劇場のなかに入ると、平土間、栈敷席、二階席を合わせても席数150ぐらいでした。祝日（11月11日の第一次世界大戦休戦記念日）だったので、子ども連れも多く、客席はほぼ満席。脚本では出演者は40名を超えますが、この日最後に舞台上に並んだのは11名でした。登場人物も物語の場面も省略があり、上演時間は2時間でした。

フランス映画では1990年ドパルデューのものがよく知られています。日本で見た舞台で印象に残っているのは、仲代達矢と若村麻由美のコンビです。また大正時代から『白野弁十郎』として翻案されて有名になり、その後島田正吾の一人芝居はかつてテレビでも放映されました。他にもまだまだあるようです。それにしてもよくできた芝居台本です。ストーリーはだれもが知っているのに何度も見てしまう。忠臣蔵みたいなものなのではないでしょうか。（以下次号）



お知らせ： **最終講義** 「アルペール・カミュとともに」 三野博司（奈良女子大学教授）
 2015年3月7日（土）14時 奈良女子大学 S235 講義室 来聴歓迎・予約不要
 ☆国際カミュ学会副会長および日本カミュ研究会会長として、長年にわたってカミュ研究にとりくんできたその歩みを振り返り、カミュの今日的意義を語ります。来年ははじめに、あらためて案内をお送りします。

『ジャメ先生と漱石を読む』シリーズ3 『日記』を受講して

今年でジャメ先生との漱石をフランス語で読む文化講座は3年目となった。初年度は『我輩は猫である』、二年目は『虞美人草』と小説が続いた。小説は背景に漱石自身が投影されているとはいえ、あくまでもフィクションとして話の展開や登場人物同士の関係性を頭に置いて仏訳を考えていた。しかし今回は、あの大家である漱石の『日記』ということで、漱石の私生活や心を覗き見するようなワクワクする気持ちでテキストを楽しむことができた。

限られた講座の回数のなかで、どうして人間漱石の人生を自分が走馬灯のように体験することができたのだろうかと思問すると、ジャメ先生とともに授業を進行して下さった浅井先生の絶妙のセレクションにあると感じている。そのテーマを列挙すると次のようになる。

- 1) 日本からの旅立ち（「ロンドン留学日記」より）
- 2) 英国人と文学知識（「ロンドン留学日記」より）
- 3) 小説執筆（『それから』日記より）
- 4) 病床にて（「修善寺大患日記」より）
- 5) 妻は…（「大正三年家庭日記」より）
- 6) 子供と話（「大正五年最終日記」より）

（題画詩）

幾度鷺群訪釣翁 柳陰多柳水西東 扁舟盡日孤村岸 山上山路不通	山上に山有りて 路通せず 柳陰に柳多くして 水西東 扁舟 尽日 孤村の岸 幾度か 鷺群 釣翁を訪う
---	--



夏目漱石「山上有山図」(1912)『夏目漱石の美術世界展』図録から

大正5年12月9日に49才で亡くなるまでに多くの名作を残し、俳句、漢詩、書、絵、謡曲、グルメなどを玄人跣のレベルで嗜んだスーパーマンの漱石も、日記を読むと、家庭では妻に手を焼き、子どもにはいい父親であり、病気で苦しみ、本職の小説執筆がはかどらないことを嘆く姿がわかり、自分たちと同じところもあるのだと微笑ましく感じた。

さて、ここで翻訳の何たるかを再認識したエピソードがあるので一つ紹介しよう。それは、第6回の漱石と子供との会話であった。子供は大人に「なぜ?」「どうして?」と聞いたがるものだが、漱石の子供も父親に、地面の下は水なのに「なぜ地面 la terre が落（おっ）こちないの」と尋ねる。それに対して漱石は「そりやお前落ちないさ」と応えた。

ジャメ先生から講座の前にいただいた仏訳は *Tu ne t'effondreras pas, tu sais!* であったので、フランス語の文法は論理的にできていると機械的に信じ込んでいる私は、主語は *Tu* ではなくて *Elle (=la terre)* ではないかと尋ねた。すると先生は *pas* の後に *avec elle* を加えて *Tu ne t'effondreras pas avec elle, tu sais!* と、修正なされたのだ。子供の地面が落ちてしまうかもという不安な気持ちを、父親である漱石が大丈夫だよとだめている情景が、ジャメ先生の訳によって鮮明に表されているのではないかと感心してしまった。

（藺田章恵）

お知らせ： 来年度で4年目を迎える「ジャメ先生と漱石を日仏二ヶ国語で読む」講座では、『書簡』をとりあげる予定です。漱石が友人や弟子たちに宛てた手紙を読むと、『日記』とはまた一味違う漱石の人となり伝わってきます。手紙の中には、そのまま「名句」となるような素晴らしい文も見出されますが、それも相手との関係を大切にす漱石の人物柄があってこそ、「生きた言葉」として響いてくるような気がします。（浅井直子）

ピエール・シルヴェストリのパリ便り (Lettre de Pierre Silvestri depuis Paris)

Histoire de ma vie... Je ne vais pas raconter la mienne mais comment celle d'un homme légendaire, sous sa forme littéraire, a influé puissamment et durablement sur mon existence.

J'ai très récemment redécouvert une œuvre qui m'avait passionné et habité durant mes études universitaires à Rouen. Il s'agit des Mémoires de Giacomo Casanova (1725-1798) intitulées *Histoire de ma vie*. Je les ai dévorées chez moi dans le XXe arrondissement, dans des cafés, des parcs, des transports en commun et d'autres lieux parisiens en tout genre. Lire cette prose dans la ville Lumière procure une joie incommensurable.



Casanova est malheureusement trop souvent réduit à un séducteur ayant eu de multiples liaisons amoureuses. Il est pour beaucoup la figure ultime du libertin. En réalité, il est bien plus que ça. Ce Vénitien a été tour à tour violoniste, écrivain, magicien, espion, diplomate et bibliothécaire.

Il a rédigé ses Mémoires en français et non en italien. De là vient pour bonne part l'attrait indélébile qu'elles exercent sur ma personne. En effet, la plume de Casanova, empreinte de latinismes et d'italianismes, ne cesse de « recréer » la langue française et d'affirmer un style propre à l'auteur.

Histoire de ma vie m'envoûte sur un autre plan, celui de la vie vécue totalement et de la philosophie qui s'en dégage. Par ses aventures dignes de bien des fictions réunies, l'écrivain incarne comme peut-être personne le XVIIIe siècle, période historique où règnent les divertissements et les plaisirs terrestres. En nous invitant tous à expérimenter plutôt qu'à interpréter au cours de notre vie, il glorifie le fait de vivre au présent. Sa manière d'être et de faire est parfaitement résumée dans le « Deviens ce que tu es » du philosophe allemand Nietzsche. Grâce à Giacomo Casanova, histoire rime magistralement avec Histoire.

(抄訳) 一人の伝説的な男の物語が、文学の形で、いかに私自身の生き方に強力に持続的に影響したか、述べることにします。私はごく最近、ルーアンの学生時代に夢中になって読んでいたジャコモ・カサノヴァ (1725-1798) の作品、『我が生涯の物語』(邦題『カサノヴァ回想録』)を再読しました。パリ 20 区の自分の部屋、カフェ、公園、列車やバスの中、その他あらゆる所で、むさぼるように読みました。パリで彼の文章を読んでいると、はかりしれないほどの喜びがあります。カサノヴァは残念なことに、あまりにたくさんの恋愛関係を持った誘惑者とされています。リベルタンの最後の大物ですが、実際には、それ以上の人物です。このヴェネチア人は、次々とヴァイオリニスト、作家、奇術師、スパイ、外交官、図書館司書になりました。

『カサノヴァ回想録』 *Histoire de ma vie*

◆カサノヴァは、1725年4月2日ヴェネツィアに生まれ、1798年6月4日ボヘミアのドゥックス(現チェコ共和国ドゥブツォフ)で亡くなる。ヴェネチア人だが、本はフランス語で書かれた。当時の上流社会では、フランス語が最も広く用いられていたため。正式な題名は『1797年までの我が生涯の物語』(*Histoire de ma vie jusqu'a l'an 1797*)。出生から1774年までのカサノヴァの生涯が語られている。

◆邦訳には、岸田國士訳(岩波文庫全7巻、訳者急逝で未完)、田辺貞之助訳(集英社全4巻/オンデマンド版全8巻で再刊)、窪田般彌訳(河出書房新社全6巻/新装版全12巻)などがある。

彼は回想録を、イタリア語ではなくフランス語で書きました。この本が私に及ぼした消えることのない魅力は、かなりの部分、そのことに由来します。カサノヴァの文体には、ラテン語とイタリア語の特徴がしみ込んでいて、たえずフランス語を「作り直し」、この作家固有の特徴が示されています。

『カサノヴァ回想録』は、完全に生きぬいた生と、そこから引き出される哲学の側面でも私を魅了します。数多の空想物語にもひけをとらない冒険のために、カサノヴァはおそらく世俗的な快樂に満ちていた18世紀の人間を、具現化しています。人生においては、考えるよりも体験するように私たちを誘い、現在を生きることを称えます。彼の存在と行動の様式は、「ありのままの自分になれ」というニーチェの言葉に要約することができます。カサノヴァのおかげで、挿話的な小さな物語が、見事に大きな「歴史」と通じ合っていることがわかります。

第35回 奈良日仏協会シネクラブ例会(10/26) 報告記事

当シネクラブの例会は毎回 10~20 人の参加者数で、2007 年の発足当初からほとんど変わらないのですが、参加者の顔ぶれはいつも違って、常連の方・久しぶりの方・はじめての方がバランスよく入り混じっています。知らない人同士が、狭い部屋でいっしょに同じ画面を見つめ、映画について語り合うと、ほっこりした空気が生れるのは、映画の魅力のおかげでしょうか。今回は、今年で没後 30 年となったフランソワ・トリュフォーの作品から『隣の女』(1981) をとりあげました。例会で皆さんから寄せられたコメントを以下に紹介します。



：今までこんなに強烈な恋の映画は見たことがなかった。日本人の恋愛観とフランス人のそれとは異なるような気がした。最後を締めくくる *Ni avec toi, ni sans toi* 「あなたと一緒にでは苦しすぎる、でもあなたなしには生きていけない」の言葉が、非常にきいている。

：女優ファニー・アルダンの「狂気」と「冷静」のバランスのとれた演技がよかった。

：トリュフォーは大変な読書家で、学校には行かなかったが、読書を通じて感性を養った。セリーヌやブルーストも愛読していた。「病」としての「恋」を描いているのは、ブルースト的ともいえる。しかし彼は、文学作品からインスピレーションを得ても、すべて「トリュフォー映画」に作りかえてしまうところが独創的。

：男女二人の関係が右へ行ったり左へ行ったり、ストーリーが進むにつれて変わる所が、面白かった。最初は女の方が積極的で、男の方はたじろいでいた。ところが真ん中あたりで、男の方が女を追いかけるようになる。そして最後は、女の方がピストルを出す。このへんの男と女の気持ちの移り変わりの描き方が、恋愛の核心をついている。

：サスペンスタッチで、深刻な恋愛映画ではあるが、ちょっと笑えるような場面もあって、楽しめた。映画監督としてトリュフォーは作品を重ねて、いろんな面で熟達していると思う。

：この映画では、どちらか一方ではなく、お互いにストーカーになり合っている所が、面白い。日本でも恋がエスカレートしてのストーカー事件はあるので、フランスだけのことではない。

：恋愛には、《つきあったら苦しすぎる》ということはある。若い頃、きょうの映画のような苦しい恋をしていた友人から相談を受けたことを思い出す。とてもフランス的な作品だが、「映画」として面白かった。

：テニスコート経営者の女性の役どころがうまい。彼女もまた「狂おしい恋」の体験者。彼女のナレーションが、全体のドラマの枠をつくっている。
(浅井直子)

第36回 奈良日仏協会シネクラブ例会案内

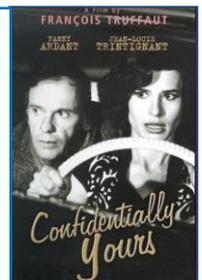
(日時) 2015年2月22日(日) 13:30~17:00 (会場) 奈良市西部公民館の予定

(プログラム) 『日曜日が待ち遠しい!』 (Vivement Dimanche!, 1983年, 106分)

(監督) フランソワ・トリュフォー

(参加費) 会員無料 一般 300円 (懇親会) 例会終了後「味楽座」にて

(問い合わせ) ☎ 0743-74-0371 Nasai206@gmail.com

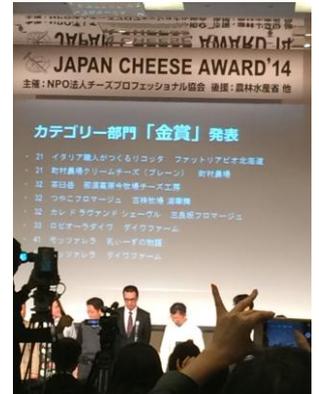


トリュフォー特集第2回目は、遺作となった『日曜日が待ち遠しい!』を取り上げます。『隣の女』に続いて、ファニー・アルダンの主演作。南仏を舞台に、不動産経営者(ジャン＝ルイ・トランティニャン)の女性秘書(アルダン)が、不可解な連続殺人事件の真相究明に乗りだします。ギャングも探偵も出てこないトリュフォー風「フィルム・ノワール」。10月の『隣の女』例会時にも指摘されたトリュフォーの「軽い笑い」のセンスが、この作品では存分に発揮されています。アルダンによれば、トリュフォーはこの映画を作る時、ハンフリー・ボガート主演、ハワード・ホークス監督の『三つ数えろ』を見て、その映画作りに力づけられたそうです。映画評論家セルジュ・トゥビアナ氏は、「トリュフォーは、いつも女性を中心に映画を構想し、最初から最後まで女性が活躍する物語を作ろうとしていた」と言います。主役のアルダンが、犬といっしょに音楽によって軽快なリズムを刻んで舗道を闊歩するオープニングのシーンには、胸がはずんでくるような爽快感があります。カラーにはないモノクロ映画の魅力を伝えようとしたトリュフォーの世界が堪能できる作品です。

国産ナチュラルチーズコンテストに参加して

10月30日、チーズプロフェッショナル協会が主催する初の国産ナチュラルチーズコンテスト「JAPAN CHEESE AWARD' 14」が東京にて開催されました。私は審査員の一人として参加してきたのですが、その時のお話を。

全国よりエントリーされたチーズは、60もの工房のなんと120品。その数に驚かされます。チーズといえばやはりフランスなどヨーロッパのものに目が行きがちですが、日本にもこんなに多くの生産者の方たちが頑張っておられるとは、感慨深いものです。ちなみに現在日本に登録されるチーズ工房は210軒。仕様書とともに提出されたチーズは14のカテゴリーに分け審査。審査員は、チーズプロフェッショナル認定者で品質評価のトレーニングを受けてきたメンバー総勢80名が審査にあたりました。またゲスト審査員として海外のプロの方も。



審査員は5~8名でグループになり、16のグループがそれぞれ6~8種類を審査したのですが、私は「非加熱圧搾・熟成4カ月以上」というカテゴリー（セミハードなどと分類される固めのチーズ）を担当しました。審査という上から視線のようで恐縮なのですが、審査員は皆もちろんチーズを愛する者。ですので、単にそのチーズが良いか悪いかだけを判断するのではなく、どうすればより魅力的なチーズになるか、欠点の原因となるものは何に起因するのかなども考えジャッジし、フィードバックすることで生産者を応援し、日本のチーズを盛り上げたい気持ちで臨みました。

今回生産者のかたのお話を聞くことも多かったのですが、生き物や自然を相手にすることがいかに困難か！ミルクの質は、動物たちを取り巻く環境やエサにより大きく左右されますし、チーズを育てる酵母や乳酸菌の働きは天候で違ったりマニュアル通りにいかない。目に見えない微生物と対話しながら作っているんだ…と。先日のニュースでは「バターが店頭には並ばない」と報じていました。原因は生乳不足。厳しい酪農農家の現状を垣間見た気がします。巷ではTPP交渉で乳製品の関税引き下げや撤廃の話も出ています。決まれば、日本のチーズ作りに大きく影響する事でしょう。



そういった中でチーズコンテストが行われ、数多く受賞チーズが出たのは嬉しい事です。生産者の方がより元気になり、素晴らしいチーズ作りをされることを願います。産地の地名を冠した名だたるチーズ、カマンベール、ゴルゴンゾーラ、ゴダー…と並んで、例えば日本の産地「トカチ」が並ぶ日がくるかもしれません！

(法人会員ビストロルノール 北田由佳)

☆「JAPAN CHEESE AWARD 2014」の詳細はチーズプロフェッショナル協会ホームページでご覧いただけます。
☆第12回チーズ検定が2015年3月9日（月）にビストロルノールにて実施されます。お問い合わせはビストロルノール（☎0743-75-9555）、あるいはチーズ検定ホームページ <http://www.cheesekentei.com/> をご覧ください。

Recette du « Vin chaud » 「ホットワイン」の恋しい季節になりました。奈良に住むフランス人の知人から教わった、とても簡単な作り方を紹介します。寒い冬の夜や風邪気味の時、クリスマスの集まりで等、いちど試してみてください。(編集部)

Ingrédients (材料) : une bouteille de vin rouge, un bâton de cannelle, quelques clous de girofle, une orange, du sucre ou du miel. (赤ワイン一瓶、シナモンスティック、クローヴ(ホール)、オレンジ一個、砂糖または蜂蜜)

①Mettre dans une casserole le vin, la cannelle, les clous de girofle et l'orange.

片手鍋にワイン・シナモン・クローヴ・オレンジ(適量)を入れる。

②Faire chauffer sans porter à ébullition. 沸騰させないように、鍋を火にかけ温める。

③Ajouter du miel ou du sucre selon votre goût. お好みで、蜂蜜か砂糖を加える。

④Servir bien chaud ! 熱いうちに召し上がれ！



Astuce : Dans les marchés de Noël en France on voit aussi de plus en plus souvent maintenant du « Jus chaud ». C'est la version du vin chaud pour les enfants et pour tous ceux qui ne boivent pas d'alcool. Il suffit de remplacer le vin par du jus de pomme. 子供やお酒の苦手な人のためには「ホットジュース」もあるようです。

第122回 フランス・アラカルト報告



122回フランス・アラカルトは奈良市学園朝日町のワインショップ「サン・ヴァンサン」で開かれました。非常に気持ちのいい機会。新しいメンバー、古いメンバー、熟成されたお酒、新しいフレッシュなお酒。天候も良く（駅からも近く）、私たちが慣れ親しんだお菓子（チョコレート、シュークリーム）を日本に普及させた米津風月堂の流れを組む米津家に生まれた米津春日（はるび）リーガロイヤルホテル料理特別顧問のお話は特に印象深いものでした。またお店のオーナーでソムリエの竹中宣人氏のお話はワインへの知識と愛が伝わってきて、さすが元スポーツマンと思わせるひたむきさを感じさせてくれました。席

もちょうど満席でフランスの食文化に対する思いが熱気として溢れていました。また集まりましょうね。（仲井秀昭）

第123回 フランス・アラカルトのご案内

❖日時：2015年1月22日(日)15:00～17:00 ❖会場：カフェ・ルーチェ(奈良市坊屋敷町42 tel.0742-26-4170)
近鉄奈良駅から徒歩5分(奈良女子大南門近く)

❖会費：会員800円、一般1300円(ケーキセット付き) ※定員(20名)に達し次第締め切ります。

❖問い合わせと申し込み先：bonjournara@gmail.com 又は FAX.0742-62-1741

❖ゲスト：石原昌和 NPO 法人奈良能理事長(1936年、奈良市生まれ。大蔵流狂言を故二世茂山千作、故父昌に師事、3歳にて初舞台。金春流を金春栄治郎、桜間金太郎に師事、4歳にて初舞台。35歳より薪御能保存会副会長、談山芸能文化会理事長、京都能楽協会理事、おん祭り保存会理事、NPO 法人奈良能理事長、奈良オペラ座座長、春日若宮おんまつり保存会理事、石原楽器代表者。大神神社能、芝能、善光寺薪能、高野山薪能、一休寺薪能、談山能、東大寺能、などの世話役を長年勤める。2002年鑑真和上の故郷である中国揚州大明寺にて、新作能「鑑真大和上」奉納)

❖題目：「フランスと能との関わり～フランスにおける能公演をめぐる」❖ゲストの石原氏に、フランス・スイス・シンガポール等で海外公演の世話役、演者として参加した経験を元に「能とフランス」をテーマにお話頂きます。また後半は三野博司先生が「フランス人作家の見た能舞台」をめぐるのお話、楽しみですね。

第124回 フランス・アラカルトの予告 ❖日時：3/31(火)10時半～15時 ❖会場：松伯美術館(奈良市登美ヶ丘2-1-4)近鉄学園前駅から徒歩5分 ❖内容：小林智子先生によるお茶会(伯泉亭)、長嶺知永子さんのお話「サン・フェアリー・アン」他、いいだむつみさんのフランス・シター演奏(旧佐伯邸) ❖会費：会員1800円、一般2300円(美術館入館鑑賞料、お茶代を含みます) ❖申込み：bonjournara@gmail.com 又は FAX.0742-62-1741
❖定員50名 ❖昼食の1品をお持ちいただく予定(正式には改めてご案内)

シャンソン歌手・中津洋子さんを偲んで

奈良日仏協会の元会員でシャンソン歌手の中津洋子さんが、10月10日に逝去されました。むかし会員の中谷みよ子さんのお家で開催されていたシャンソン講座に参加して、中谷さんお手製のティラミスをお馳走になり、先生と楽しくお喋りしたことを、今でもよく覚えています。心よりご冥福をお祈り致します。(浅井直子)

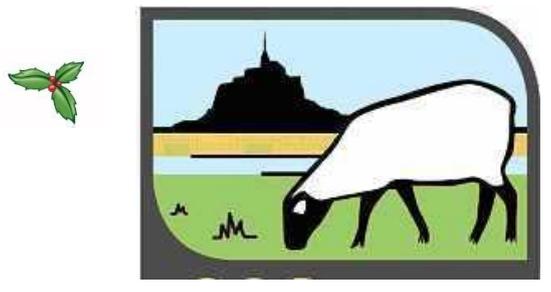
洋子先生は私にとって大切な友人、相談相手でした。お久しぶりね♪とお会いしてお茶をする。・・・だから、とっても・・・寂しいです。1990年代後半から5、6年間、奈良日仏協会主催中津洋子シャンソン教室を学園前の我が家でお世話させて頂きました。明るく適切なる指導の下、先生のピアノ演奏と共にフランス語でシャンソンを歌い、食べて、語らって・・・毎月一回、10人～20人のメンバーとの愉快で素敵な集いでした。その後多くのコンサート活動をされながら、NHK文化センター・朝日カルチャー他でシャンソン教室を主催。お会いする度に「私の土台は奈良の、あのお教室です!」と言ってくださる光栄に、嬉しく思っていたものです。《フランス語で歌うシャンソンの会》を立ち上げられて数年。その活動も軌道に乗り始め、これからの夢がいっぱいおありでした。

ありがとう、洋子様♪ 合掌。(中谷みよ子)

総会および懇親会の開催 (予告) 奈良日仏協会の 2015 年度総会を以下のとおり開催する予定です。
 ◆日時：2015 年 2 月 11 日 (祝・水) 14:00 より約 1 時間 ◆場所：菜宴 (奈良市小西町) ◆総会終了後、
 同じ場所で懇親会を開きます。1 月下旬に改めてご案内しますが、ご予約の程よろしくお願ひします。

《2014 年度第 5 回理事会報告》 ……事務局
 日時：2014 年 11 月 20 日 (木)、15:00~17:30、場所：菜宴
 出席者：三野、野島、濱、浅井、仲井、中辻、樋口、藤村、三木 (監事)、久保田 (オブザーバー)
 議題 1. 前回理事会以降の活動を振り返る
 1) フランス・アラカルト：9 月 26 日 第 5 回、ピストロ・ルノールにて (既報)。2) ミュッシュランガイド関西編の刊行パーティ：10 月 20 日 スイスホテルにて、野島副会長が参加。3) シネクラブ例会：10 月 26 日 西奈良公民館にて (Mon Nara No.266 で報告)。4) 秋の教養講座：11 月 3 日 南城理事の講演 (Mon Nara No.266 巻頭記事で報告)
 議題 2. ホームページの更新体制について
 HP 管理者久保田会員を招き、奈良日仏協会 HP 管理について新たな方針を協議。理事のアクセス権の再整理及び HP 管理者のシステム変更権を承認。
 議題 3. 当面の行事・活動計画 (いずれも Mon Nara No.266 で報告ないし予告)
 1) フランス・アラカルト：11 月 23 日 第 6 回、サンヴァンサンにて。1 月 22 日 第 7 回、Cafe Luce にて、2) 年次総会へ向けて：2 月 11 日に総会と懇親会を開催する。第 6 回理事会を 1 月 15 日に開催し、総会へ向けた課題を検討し議案を決定する。3) 3 月アラカルトの計画について事前の協議を行い、企画の概要および実施を承認。3 月 31 日 松伯美術館及び日佐伯邸にて。
 議題 4. その他
 1) フランス・アラカルト委員会制度について三野会長より見直しの提案があり、意見を交換。十分機能しなかった委員会制度を廃止し担当者制度を採用したい。アラカルト担当理事に加え一般会員も条件付きでアラカルトの実施を可能とする方向。企画乱立の防止策 及び収支計画と報告の確実化について意見が出された。2) 理事の登用・交代について情報と意見を交換。

会員通信 ☒ ☒ ☒ ☒ ☒
 ☆会員の方から、NHK ラジオ講座応用編 10 月~12 月の「ファッションをひもとき、時をよむ」をテーマにした放送がとても面白い、との情報が寄せられました。10 月は映画『ポリー・マグーお前は誰だ?』、11 月は小説『失われた時を求めて』、12 月はファッション・ビジネス関係者のインタビューが題材になっています。
 ☆忘年会・クリスマスディナー・新年会などで、フランス料理を賞味したり、お家で料理に腕をふるう機会も増えることでしょう。Bon appetit!
 ☆会員の皆様自身のお菓子やお料理の簡単レシピ (recette) がありましたら、ぜひお寄せください。



編集後記 ▼今年の協会主催の「秋の教養講座」は巻頭記事にある通り、南城理事の浩瀚な見識に基づく興味深い講演となりました。▼西洋絵画の特徴は「遠近法」と「陰影」であるとのこと。そういえば、日本の鳥獣戯画でも、六歌仙巻巻でも源氏物語絵巻でも「線」ははっきりとありますが「影」はなくて設計図に同列です。今の日本絵画ではもうこの伝統とは決別して肉食民族的感性にあふれるものが大半ですね。▼西洋絵画のその後の変遷は写真術の台頭に伴う写実主義からの脱皮、飛躍でしょう。その果実は色々あるでしょうが、なんといっても「印象派」と「立体派」の出現が目立った二本柱です。いままでモヤモヤとしていた私の頭がすっきりとしてそれこそ「目からウロコ」の日となりました。(T.Nakaura)
 ▼【お詫び】：Mon Nara 9-10 月号に掲載された山本邦彦氏 (会員・奈良女子大名誉教授) の「紀行浮世絵をめぐる日仏文化交流あれこれ」のタイトルは、正しくは「浮世絵をめぐる日仏文化交流あれこれ」です。編集ミスにより、「紀行」の二文字が誤って附されてしまいましたこと、謹んでお詫び申し上げます。▼この記事について、福島日仏協会より転載の希望がありました。Mon Nara の記事を通じて、他府県の日仏協会と交流のきっかけがもてるのは、大変喜ばしいかぎりです。(N.Asai)
Avec nos meilleurs voeux de joyeux Noël et heureuse année 2015 (l'an de mouton) !

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
 ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。会員通信欄もご活用ください。
 締切日：次号は **1 月 31 日**が原稿締切日です。

Mon Nara novembre - décembre 2014 **11-12 月**合併号 numéro266
 奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara
 HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : afjn_info@kcn.jp FAX 0742-62-1741
 〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第 30 号 [郵便物のみ] ©発行責任者：三野博司